

『中世禅家の思想』(日本思想大系16)

山内 舜雄

本書には、『興禅護国論』(明庵栄西)・柳田聖山校註、『中正子』(中原円月)・入矢義高校註、『塩山和泥合水集』(抜隊得勝)・市川白弦校註、『狂雲集』(一休宗純)・同氏校註。等の四巻が収められ、それぞれの補註が加えられたうえ、校註者による適切丁寧な解説が付されている。岩波刊行の、『日本思想大系』については、すでに評価の定まるところ、あえて贅言を要しない。

直ちに、本題に入ろう。まず『中世禅家の思想』といっても、それがみな済門に属するものであることは、言を俟たない。残念ながら洞門には、道元禅師の『正法眼蔵』をのぞけば、宗内はともあれ、当時の思想界の第一線に出せる著作は、極めて尠い。羨しき限りであるが、これが洞済両門の、思想的・文化の実態であろう。

それはさて置き、私のできる書評は、柳田聖山氏校註並に解説の『興禅護国論』一巻し

かない。同氏より本書の寄贈をうけ、開巻もどかしく、ただちに一読、再読した次第であるが、というのも近来、多少栄西禅師に関心を持ち、『同論』中心の講義を、続けてきたことによる。

その際、適当な『同論』のテキストに窮した経験があるだけに、今回の刊行を、まず心からよろこびたい。定本には、建仁寺両足院蔵 寛文六年版本(高峰東峻手沢本)が用いられ、訓読本を本文とし、原文がそのあとに揚げられ、頭注は語釈のほか、とくに引用文・故事にくわしく、そのうえ適宜本文に段落を設け、句読点・濁点・並列点が施されているので、たいへん読みやすくなっている。漢文に弱い現在の学生でも、これなら食いつけるであろう。あまり親切すぎて、原文をまします敬遠することを懼れるくらいである。頭注なども、簡潔な中に、同氏特有の近代的センスがひらめき、面倒なものは補註にま

わし、苦心のほどが察しられる。完備されたテキストの出現を深謝する次第である。

さて解説によると、『興禅護国論』は、済門では、あまり重要視されなかったらしい。それどころか、「特にたのまれでもせぬかぎり注釈など書く」ことはなかったようである。

これは栄西禅師の人物評価が一般にきわめて低いうえに、書名の国家主義的プロパガンダが嫌悪の情をかきたてたという。そして、撰述したという建久九年(一一九八)からおよそ四七〇年間、その流伝はまったく不明で、中世禅林における長い忘却の後、寛文版の出現となった。が、義諦の偽撰説があることは周知のとおりで、この寛文版の不備をあらためて、ともかく本書が一般によめるようになったのは、建仁寺両足院の高峰東峻(一七三六—一八〇一)の功績であるという。彼の献身的研究により、定本ともいうべき安永版が出され、さらに『鑿竅』や『年譜』等の精細な研究が行われた。詳しくは、同氏の解説にゆずるとして、留意すべきは、「栄西禅師」と、われわれは気安くいうけれども、やはり済門の中には、東峻のような、その法系につながる特別の専門的研究者がいて、このような基礎的研究が地道におこなわれていた、と

いうことである。

どうも洞門の人たちは、栄西禅師が済門で、あまり重んじられないのをよいことにして、かんたんに道元禅師の「先駆者」くらいの地位をあたえ、あたかも「露払い」であるかの如き失礼な解釈を下しているふしが、みうけられる。『興禅護国論』と、『辨道話』とが、極めて密接な関係にあることは、つとに衛藤博士が指摘するところであり（『宗祖としての道元禅師』）、われわれは、もうすこし済門における栄西研究に謙虚に耳を傾ける必要があるのではあるまいか。

次に栄西研究において、問題となるのは、柳田氏が指摘しているように、その密教部門の解明である。

「これまで知られた禅の初祖としての栄西伝は、ほとんど氷山の一角にすぎない」といわれる如く、栄西の密教界における活動をぬきにしては、栄西の全人物像は成り立たず、この点、禅宗側からの栄西研究の大きな盲点となっていることを、重ねて強調したい。かつて大屋徳城氏も、如上の盲点を指摘しているが、これは資料的に密部の典籍のつねとして、後人の添加が予想されていることにもよる。また、

「『興禅護国論』の第四古徳誠証門にあげられる古代禅宗史のときは、客観的な歴史資料というよりも、栄西その人の禅宗研究の過程を示し、栄西における密教より禅への思想展開を語るものといつてよい。」とある。近年この点に気付き、栄西を密教から、すなわち台密の方から視線を当ててみたら、ちがった人物像が得られるのではないかと思ひ、——天台の視座から見た『興禅護国論』の研究——「栄西的世界の再把握」と題して、栄西独自の台密禅併修の世界をうかがった論攷をものしたのであるが（近刊の『道元禅の総合的研究』に掲載予定）、このたび柳田氏の解説から、おおいに自信を得た次第である。

その際、感じられることは、日本天台の立場から『興禅護国論』をみてゆくと、じつにムリなく割れる、ということである。禅宗側からみると、よほどの附会をしなければ、『同論』から栄西の禅門始祖化をはかることはむずかしい。栄西はいちど密教の世界に返してみるべきではあるまいか。そうすることによって、栄西は、またちがった評価を受けようと思われる。

このことは、栄西の戒律に対する態度についていえる。伝教の遺志を継ぐという以

上、大乘菩薩戒を奉持すべきであるにかかわらず、大小兼持を唱え、かつ実践した「持律第一葉上房」の自己矛盾をどのように解釈すべきであるか。この点についても同氏は、貴重な示唆をのべられているが、やはり如上の線にそつて考察するとき、かかる矛盾した榮西的世界が、ある時点で成り立ち得るようにも思われるのである。

ともあれ、「氷山の一角」にすぎない、従来の禅宗側からの栄西研究を超えて、よりひろい視野からの栄西把握が痛感されるとき、かれの主著ともいふべき『興禅護国論』が、厳密な校註と共に、適切な解説を付して、刊行されたことは、斯界のためによるこぼしい。これを機会に栄西研究の再展開を希念する次第である。

本書の中で、『興禅護国論』一巻のみの書評におわってしまったが、つづいて『中正子』を校註された入矢義高先生には、かつて京都遊学の折、みじかい期間であったが、柳田聖山氏と共に『祖道集』を読んでいただいたことが、なつかしく想い出される。あれから二〇年の歳月が経つ。なまじ大学が大きくなつたばかりに、忽々にあけくれる自己を省みながら、ご両所の健勝を祈つて擱筆する。